

郡山女子大学建学記念講堂第一緞帳小史

— メタルビーズバッグからアルミ製緞帳へ —

The short history of the first theater curtain of Koriyama Women's University

— from metal beaded bag to aluminum theater curtain —

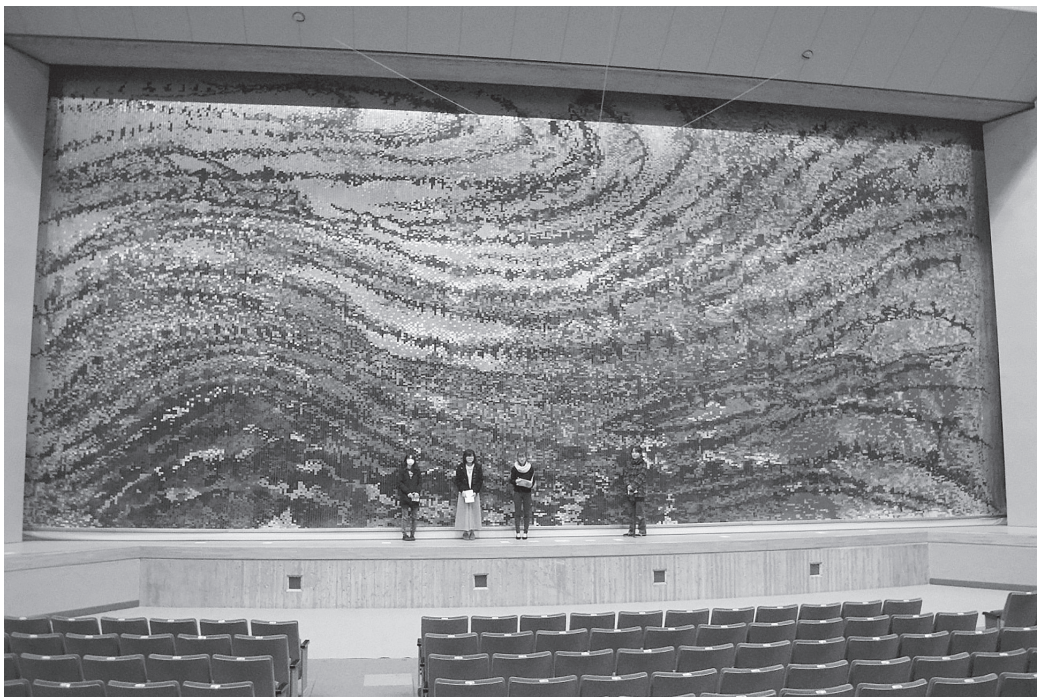
齋藤 美保子*

Mihoko SAITO

When Dr. Fusa Sekiguchi with her fellows learned how to weave the metal beaded bag from the widow of the novelist Mishima, she was inspired to use the same manner to make the first theater curtain of the memorial hall for her school's forty years anniversary, in 1985.

Yoko Mishima acquired the technique from Yoshiko Kurahashi who revived the French metal beaded bag in 1979.

Then the first theater curtain of Memorial Hall of Koriyama Women's University is the symbol of women's hand craft and aesthetic sense in the 1980's.



〈大ホールから見た第一緞帳〉 撮影筆者

※ 文化学科

はじめに

創立四十周年を記念して丹下健三に基本設計を委ねた郡山女子大学の「建学記念講堂」(1985年秋竣工)には、四十周年記念式典が挙行された1986(昭和61)年から二枚の緞帳^{どんちよう}が備えられている。荘司福の日本画を原画とする第二緞帳に関しては既に一稿を上げたので、七十周年記念式典を終えた今回は、金属的なモザイク画のような印象を与える第一緞帳について、小史をまとめることにした。

1. 第一緞帳

劇団四季のミュージカルも上演できる大舞台であるから、緞帳の大きさは、横幅19.2メートル、高さ8.8メートルと大規模である。しかも大舞台を挟んで大ホールと小ホールの客席が対面する形に配置されているため、大ホール側に設置されている第一緞帳を降ろすと、両面が等しく装飾されている緞帳の裏面が、小ホールから見た舞台の背景になる。

緞帳の概要を「昭和60年度備品台帳」で調べると、次の通りである。

「軽金属製両面装飾大緞帳」 W19,200mm×H8,800mm (株) アート川島60年12月19日

1. アルミ引き抜き材：37.5mm×27.5mm 150,000個

(表面仕上げ：アルマイト、電極アルマイト及羽布仕上げ)

2. 塩ビ押し出し材：アルミジョイント材4,500m

3. ジョイントパッキング：ジュラコン製、150,000個

4. 2φ,SUSワイヤー：吊りワイヤー 9,000m

5. 3φ,SUSワイヤー：補強吊りワイヤー 180m

6. ワイヤーストッパー：2φ用 1,000個

7. " " : 3φ用 20個

8. 上部調整バンド : 穴あけ加工共 20m

9. " 吊り棒 : ネジ山付 1,000本

10. " ナット : 1,000個

11. バトン固定バンド : 40本

12. ワイヤー及吊り棒固定クリップ : 1,000個

13. 下部フレンジ用SUSチャンネル補強板具共 : 20m

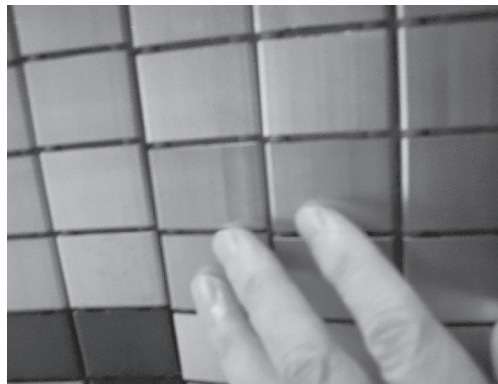
14. 裾ボーダー : 布製

15. 原画拡大及制作指示書作成

金属的なモザイク画のような印象は、「1. アルミ引き抜き材」を15万個も使用した構造によることがわかる。モザイクの一片にあたる「1. アルミ引き抜き材」は、正面から見れば横3.75センチメートル、縦2.75センチメートルの長方形であり、上下から見れば扁平な環状をなし左右が^は埋め込み易くなっている。「15. 原画拡大及制作指示書作成」というのは、学園の創立者・関口富左先生の原画「年輪」を拡大し、実際の製作に対応できるように、アルミ材のひとつを一升として描き起こした拡大図と指示書のことである。原画は関口富左著『折々に』に扉絵として掲載され、額装された拡大図は、現在も大ホール後ろ側のフォワイエに飾られている。



<原画「年輪」拡大図>



<緞帳になったアルミ引き抜き材>

指示書の色と同じ色の「1. アルミ引き抜き材」を選んで、8.8メートルに切って縦糸の役割をする「2. 塩ビ押し出し材」に通して埋め込む。「3. ジョイントパッキング」を挟んで、次の色の「アルミ引き抜き材」を通し埋める。この作業を多くの人手を要して繰り返していくのである。備品台帳では15万個となっているが、学内では「12万個のピースを使った」と言い伝えられている。二つの数字の差が気になった。そこで実際の緞帳で、最下段のアルミ材を数えてみた。その結果、横幅に480個のアルミ引き抜き材が使われていることがわかった。緞帳を下げて9メートル近い高さのピース数は数えることができないので、<原画拡大図>の升目を数えることにした。彩色した筆跡が重なった部分もあり、正確に数えることは難しかったが、おおよそ縦の升目が275個であった。480と275を積算すると、132,000である。アルミ引き抜き材の色は黒、赤、桃色、金、銀、そして多様な濃淡の灰色である。各色ごとの数にゆとりをもって用意されたアルミ材が15万個であったのだろうか。いずれにしても学内の謙虚な言い伝え12万個よりは、かなり多めのアルミ材が連ねられているのである。

ひとつひとつは軽いアルミ材だが、12万個を大きく上回る総体と、それを繋ぐ部材の重量は相当なもので「1. アルミ引き抜き材」の中空を通した「4. 吊りワイヤー」は9.000メート

ル、「5. 補強吊りワイヤー」は180メートルの長さが必要であった。総重量は2トンにも及ぶという。

この第一緞帳については、『創立四十年学園史』で関口富左先生(当時は学園長・学長)が次の様に書いている(223頁)。

本講堂でさらに特記すべきことは、緞帳である。学園長のかねがねからの構想から、まったく新しい製作法が生まれ、アート川島社長・岡本氏と沖種郎氏とが加わり、工法を創出した。デザインは、五百年を経た櫟の木目の美しさに魅せられ、これをモチーフとして思いのままに、お茶の懐紙にペンで記し、朱肉をボカして描いたものである。基本の工法としてメタルビーズの織り方に拠っている。大講堂の最大の空間を占める緞帳のデザインは、軽い気持ちでいたずら描いたものが、丹下先生に御賛意をえて原画となったことは不思議というほかない。

さらに記さねばならないことは、この大緞帳を学生・生徒・教職員の有志で手造りしたことである。伊藤泉教授と卒業生の島田フミ氏为中心となり、学生たちを指導し、作製しえたものである。これまた、世界にただ一つの緞帳といえよう。講堂西側ステージわきに、製作者の氏名を記した額をかけた。

沖種郎氏というのは丹下健三門下の建築家で、元芝浦工業大学の学長であった。建学記念講堂の設計に直接関わり、その後学内の校舎を複数設計するばかりか、大学人間生活学科で教壇にも立たれた。

原画は関口富左先生自らが描いた即興的なペン画であった。朱肉をぼかして加色したというのが、いかにも富左先生らしい。この自由さが、日本の高度経済成長下の建築を統帥してきた大建築家、丹下氏をもうならせたのであろう。五百年を経た櫟の木目の美しさに魅せられたというのは、第二緞帳の原画が荳司福の《霧林》であることとも響き合い、当時、富左先生が樹木に深く心を寄せておられたことを物語っている。

膨大な数のアルミ材を指示書の色の通りに詰め込む作業は、昭和60年当時の大学生、短大生、附属高校生と、教職員が協力して行った。製作に関わった当時を知る教職員の声を集めてみる。

- ・クラスの学生を連れて、製作に参加しました。
- ・指示書の色と違うと間違った所からはずして、またやり直さなければならなくて大変でした。
- ・初めは教室で作っていたけれど、だんだん大きくなって、最後は講堂の舞台の上に寝かせる形で作りました。
- ・最初自分は今何をさせられているのか、ピンと来てない状態でした。出来上がってみたらこんな夢を富左先生は描いてたのかと驚き、素晴らしいアイデアと感動しました。さすがです。

・四十周年記念式典の時の感動は忘れません。その後も、緞帳のこの部分は私たちが作ったという誇りがありました。

2. 三島瑤子氏を招いてのメタルビーズバッグ製作

先の文章の中で、「基本の工法としてメタルビーズの織り方に拠っている」という一文に注目したい。富左先生は上京の度に銀座和光に立ち寄られるのを楽しみにされていたが、あるとき和光の展示でメタルビーズバッグに出会い、美しさに魅了された。美しいものを求める極めて積極的な御性格から、自らその製作を思い立って、指導者を探した。そこで紹介されたのが、平岡瑤子氏(1937年～1995年)であった。日本画家、杉山寧の御長女で、小説家、三島由紀夫の未亡人である瑤子氏は、日本にネイルアートを広めたハイ・センスな女性で、メタルビーズ作家としても活躍された。学内では「三島先生」あるいは「三島夫人」と呼びしていたと聞く。

1982年6月に東北新幹線が大宮から開通したとはいえ、南馬込の三島家から郡山は3時間以上の時間がかかった。月に一回程度、先生を学園にお招きし、1982年に竣工した「つつじ館」で学長と数名の教職員がその技術の習得に励んだ。三島先生と富左先生、両巨頭の間で緊張しながら、最新のお洒落な技術を習得する充実した一時であったと聞く。家政学の伊藤泉教授、短大の卒業生で本学勤務の島田フミ氏、木幡幸子教授、門馬寿子教授、滝田三知江教授、高橋節子寮長・・・が集い、郡山駅への送迎やお茶の用意など、協力して会を運営した。女子大の先生方だけに、手業の習得は着実であった。織り機に縦糸を張り、メタルビーズを通した横糸を織り込んでいく繊細な作業を繰り返す。手を動かしながらも三島先生は率直な物言いで、女性同士の隔てない会話も弾んだようだ。三島先生にとっても1970年の三島由紀夫の自決から十年を経て、郡山への出稽古は心を遊ばせる機会であったのかもしれない。

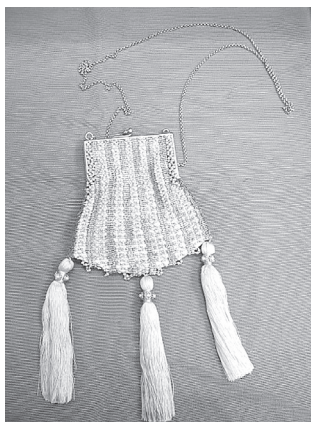
そのような中で富左先生は、小さなメタルビーズの煌めく絵柄から靈感を得て、1985年竣工を目指している建学記念講堂の緞帳を多くの人手を結集して作ることを思い立たれたのである。

製作から30年を経た現在、緞帳の手作りに率先して参加し扁額に名を連ねた方々も学内では少数になった。ましてやメタルビーズ織りの稽古に励んだ先生方はほとんど退職された。この度、何人かに声をかけ、ようやく島田フミ氏と木幡幸子氏のお作りになったメタルビーズバッグを借用することができた。なお、製作に使った織り機も拝見したいと願ったが、すぐには見つからず、引き続きお探し頂いている。

島田フミ氏のお作りになった四作のうち、最初のバッグと木幡幸子氏のバッグは同じ形である。他の方々も、まずはこの形のものをお習いになったのであろう。幅14センチメートル、高

さ17.5センチメートル、マチは1センチメートルに満たない。開け口の上部両端から38センチメートルの細い金のチェーンが、底には8センチメートルの波形の房が付いている。絵柄は各人、好みのお手本に従ったそうだ。それでも、今も附属高校生に茶道の指導に来られている島田氏が「花瓶の部分に横縞を入れてみた」と、独自の工夫を語って下さった。

ビーズのバッグはいろいろ目にするが、大抵は刺繍の様に布地に縫い付けているので、厚ぼったくなる。しかし、お二人がお習いしたバッグは、縦糸をびっしりと張ったところに、小さなビーズを通した横糸を織り込んで作られているので、極めて薄く軽い。天使の羽もかくや、と思わせるほどの緻密で軽やかな構成である。色とりどりの金属製ビーズと糸だけで織られ、絹の裏地がつき、マチはせいぜい1センチメートルほど。ハンカチと小さな手帳でも忍ばせるのであろうか。しかもメタルの硬質な質感が汚れを寄せ付けず、三十年の経年変化を感じさせない。太陽光も人工照明も敏感に反射し、そこから下がる房飾りが揺れるたびに綺麗な煌めきを見せる。



<島田フミ作品> 制作順は上左・上右・下左・下右



＜木幡幸子作品＞ 右は専用の箱と共に

富左先生もお二人と同じようなバッグを自ら製作され、1988(昭和63)年11月、勲三等宝冠章受章に際し参内されたときに、腕にかけておられたとのことである。

緞帳作りが一段落した頃、バッグ作りの教室は学外に移り、学外の女性の参加に広がった。その中にはバッグには仕立てず、アクセサリーや額絵用の作品を作る人もいた。市内の化粧品屋さんで、花椿を織りだしたメタルビーズを拝見したことがある。15センチメートル四方の、煌めく繊細な一枚であった。御最良のお客さんが織ってくれたもので、お正月には黒い塗り盆に置いてディスプレイにするとのことであった。



＜メタルビーズの花椿＞ さわや蔵

3. 倉橋佳子氏によるメタルビーズバッグの復活

このように郡山に広がったメタルビーズ織りの手法だが、三島瑤子氏にその手法を伝授したのは倉橋佳子氏である。筆者がメタルビーズの調査から倉橋佳子氏の御活躍にたどり着いたのは2016年春の事であるが、惜しくも佳子氏はその直前の1月に御逝去されていた。伝手をお尋ねした筆者の問いに、御長女の小林啓子様^{つて}が、丁寧にお手紙でお答え下さった。それによると、「アトリエにお出でになった三島様と母がビーズのデザインなどについて楽しく話しておりましたのを覚えております。1980年頃は三島様も頻繁にアトリエにいらして母との交流も多かった時期だったと記憶しております」とのことである。郡山に出稽古に行くことも相談されたに違いない。

倉橋佳子氏が1970年代のパリでメタルビーズバッグと運命的な出逢いをし、日本でその復刻に至る御活躍は、御著書『メタルビーズ 巴里十六区からの旅立ち』にまとめられている。序章で倉橋氏は次の様

1900年代初頭から30年代にかけて熱狂的に貴婦人たちに愛されながら、世界大戦が終わってみれば創り手も材料も失われ、もはや甦らせるすべもなくなってしまい、織るための道具もなければ製法もわからなくなっていました。

私は平凡な主婦でしたが、アンティークのバッグに出逢いその魅力にとらわれて、独自にメタルビーズそのもの、織機そのものから開発し、バッグの復刻を果たすことができました。その時以来メタルビーズバッグを作り続けて、いまでも創作の喜びはまったく衰えません。ほんとうに出逢いとは不思議なものですね。

復刻には何年もかかりました。巴里から遠い異国日本で、世界から一度は失われてしまったメタルビーズバッグを甦らせることができたのは、何度失敗を重ねても諦めずやり遂げられたのは、メタルビーズに心底魅せられたあのパリの日々の思い出が、今も色褪せず強烈に心にあるからだと思います。

美しいものに出逢った一人の女性が、ここまで心血を注ぎ、パリのエスプリを復刻させた見事な半生記である。更に読み進んでいくと、日本的な美学を加えて絵柄を多様に発展させたことによって、日本女性の同好の士を集めることができたとわかるのである。

更に小林啓子様から写真集『Perles metalliques de Yoshiko Kurahashi 倉橋佳子メタルビーズ 金属と糸が織りなす先生なる宇宙』を御恵贈頂いた。まさに、学園の先生方がお手本にしたと思われる、同形のメタルビーズバッグが並んだ夢の様な一冊である。両書を基に、倉橋佳

子氏の活躍を辿ってみる。

紳士服の仕事をしている夫に連れられて1971年からパリの16区に住んでいた頃、倉橋佳子氏はセーヌ左岸のアンティーク店で、華奢なメタルビーズバッグと運命的な出逢いをした。メタルビーズバッグは1900年初頭のアール・ヌーヴォー様式から両大戦間のアール・デコ様式にかけて、流麗な煌めきを見せて流行したが、その技術は第二次世界大戦で途絶えてしまった、と知る。

アール・ヌーヴォー様式はアルフォンス・ミュシャやエミール・ガレに代表される曲線を多用した優雅な様式で、生活美術への目を広げたジャポニズムの影響も見られ、日本人には親しみ易い。それに対しアール・デコは1925年様式とも呼ばれ、水平線、直線、幾何学模様を特徴とする知的な様式である。フランク・ロイド・ライトの建築の意匠や、ルネ・ラリックのガラス工芸がその代表である。鉄筋コンクリート、ガラス、クリスタル、プラスチック、そして軽金属と、次々に開発される素材で近未来的な美感を追求していたアール・デコの時代に、極小のメタルビーズを織って作られたバッグは貴婦人の必需品であった。第二次世界大戦後メタルビーズバッグは作り手の職人を失い、1970年代にはアンティーク・ショップに飾られる存在となっていた。

倉橋佳子氏はその貴重なバッグに魅せられて、ひとつふたつと買い増し、1975年に帰国したときには、数十個にもなっていたという。その後ほつれたビーズの修復を試みるうちに、自分で製作することに思い至った。1ミリメートルにも満たないアルミ製ビーズの開発、その色づけの多様化に努めて奔走する記録には息を飲む。独特の織機を開発し、最適な糸と針を世界中で探求した。夫君をはじめ、多くの協力を得たとはいえ、全くひとりの女性の発案でメタルビーズバッグの復刻に邁進したのである。そして1979年、フランスでは途絶えてしまったアール・デコの美学を纏った復刻版メタルビーズバッグを日本で誕生させたのである。

この偉業をまず、女性誌『ミス』1979年12月号が「アンティークバッグを織る」という特集を組んで紹介した。その後、『家庭画報』1980年11月号、『婦人画報』『ヴァンサンカン』『NHK婦人百科』と続く。1981年からは大阪リーガロイヤルホテルの文化教室の講座の一つとなり、同年11月、銀座・和光の和光ホールで第一回展が開催された。1982年5月には銀座松屋百貨店で、350名もの生徒作品展が開催された。三島瑤子氏の作品も含まれていたはずである。こうして1980年代、お洒落な女性の手作りとしてメタルビーズバッグは広まった。富左先生がメタルビーズや三島瑤子氏に出逢ったのもこの頃であった。倉橋佳子氏のお名前もお聞きした覚えがあるし、三島先生と富左先生が和光のサロンでテーブルに置いた物を挟んで御相談されている所に同席したこともある、と木幡幸子氏が語ってくれた。

21世紀に入ってもメタルビーズバッグ織りは息長く継承されている。高円宮典子女王が、天皇・皇后両陛下への結婚の御挨拶のあと、皇居玄関から出発されるときに「メタルビーズ」を

お持ちで話題になったのは2014年10月のことである。近年の銀座・和光での展示は、2010年4月15日から4月24日まで「倉橋佳子 メタルビーズの世界展―輝きつづける美―」、2016年1月27日から2月2日まで「倉橋佳子・潤子 伝承されるメタルビーズの世界」が開催された。メタルビーズのバッグ製作は、佳子氏の御長男の奥様を中心に、確実に継承されているのである。

現在も倉橋佳子氏のメタルビーズバッグは銀座和光の2階で、展示販売されている。筆者が訪ねた2016年12月初めには、ガラスケースの中につり下げられた楽器をモチーフにした二点が神々しく迎えてくれた。ためつすがめつガラスに顔をくっつけて眺め入る筆者に、店員がショーケースの下から箱を三つ出してくれた。島田、木幡両氏がお持ちの物と同じスエード貼りの箱で、蓋の内側にアール・デコのロゴが見える。薄紙を広げて出て来たのは、写真でよく拝見していた可憐な「薔薇」であった。もうひとつはスクエア型の持ち手のついた横長のもの、もうひとつは、茶系統の幾何学紋様を象牙一文字の開口部が引き締め、長いチェーンがついたポシェットだった。手に持ってみるとずっしりとした重みが伝わり、底の房が瀧のように流れ落ちる。

「ハンカチくらいしか入れられないかしら」と思わずつぶやいた。それを受けた店員が「倉橋先生は結構いろいろお入れでしたよ。薄くても織って作られていますから、膨らみます。先生も結構丈夫だから、普段に使って欲しいとおっしゃっていました」と教えてくれた。それなりに高価だが、母から娘、娘から孫へと伝えていけば、そんなに贅沢ではないとも言われた。丁寧な指導のもと時間をかけて自作してみるか、和光で購入するか、それは思案のしどころであるし、思案もまた楽しい。

4. 関口富左(1913(大正2)年～2013(平成25)年)と美術

関口富左先生は被服を中心とする家政学の教師として、衣食住に深く関心を寄せていた。1966(昭和41)年に来日したドイツの哲学者オットー・フリードリッヒ・ボルノー博士を郡山女子大学の教養講座に招き、講演で語られた「庇護性」という思想に感銘を受けて以来、人間における「住むこと」の重要性を確認し、それを家政学のよりどころとした。その後、博士との交流を重ね、哲学的な思考を深め、やがて「人間守護の家政学」の樹立に至った。1979(昭和54)年には、学長の激務の合間に十年がかりでまとめた論文「女子教育における裁縫の教育史的研究」で、慶応義塾大学から教育学博士の学位を取得した。その間には、「手技」の解明とその教育的意義について「和服裁縫を例として」を『郡山女子大学創立三十周年記念論文集』に寄せた。

大正ロマンから戦後の高度経済成長期を生き抜いた関口富左先生は、美しいものを求める織

細な感性と、良いものを取り入れる積極性を併せ持っておられた。特に、創立四十周年に至る1980年代は学園も軌道に乗り、六十代後半の富左先生は極めて澁刺^{はつらつ}としていた。女子の高等教育ばかりでなく、文化行政でも学識経験者としての着実な発言力を期待されていた。各種の委員会に招かれ、多くの問題と向き合う中で、最新の知識と情報を吸収していったのであろう。富左先生が美術文化への関心を深めたと思われる委員会に限っても、次の様な活動を跡づけることができる。

1. 福島県文化を考える県民会議副議長：1977年(昭和52)5月～1978年(昭和53)3月
2. 福島県建築文化賞 審査委員：1982(昭和57)年12月～1993年(平成5)2月
3. 日本私立短期大学協会 美術教育研究委員会委員長：1984年(昭和59)6月～2000(平成12)年3月
4. 福島県国際化を考える県民懇談会会長：1985(昭和60)年7月
5. 郡山市美術品収集評価選定委員会委員：1988(昭和63)年6月27日～2003(平成15)年6月30日

こうした経歴から見るに、丹下健三に基本設計を依頼した建学記念講堂が、人を包み込む安定感のある建築であること、そこに設置する緞帳を学園関係者の手技の結集としたことは、富左先生の哲学の明確な表現であり、高らかな主張であったと思われるのである。

おわりに

アクセサリー関係の美術館を訪ね歩き、資料をめくっていると、20世紀前半、クリスタルやプラスチック、アルミ等の軽金属等の新しい素材で、いわゆるアール・デコの美学に則って、身の回りの装飾品を果敢に製作したことがわかる。しかし第二次世界大戦でそうした美学も技術も多くが途絶えてしまったものが多い。1980年代の日本は、後にバブルと呼ばれるほどの好景気で、身の回りを美しく整えることに関心が向いた。特に、自由を獲得しつつあった意識の高い日本女性は、美的な好奇心も強かった。百貨店でアール・ヌーヴォーやアール・デコの美術展が開かれて、多くの女性客を魅了したのもこの頃である。そうした熱い情熱が、第一緞帳のアルミ素材ひとつひとつが奏でる煌めきに結集しているかの如くである。

第一緞帳は1980年代の日本女性の手技と「第二アール・デコ」とも呼べる美学の象徴なのである。

参考文献

関口富左発行『創立三十周年記念論文集』郡山開成学園1977年

関口正発行『創立四十周年学園史』郡山開成学園1986年

関口富左著『折々に』郡山開成学園1986年

倉橋佳子著『メタルビーズ 巴里十六区からの旅立ち』文芸社2004年

倉橋佳子著『倉橋佳子メタルビーズ 金属と糸が織りなす繊細なる宇宙』アトリエクラハシ2007年